



和紀周白集

坤



枇杷園句集卷之三

秋

初秋

をり秋の川流よいでる小きさの風

拙堂

松の葉の落さるる秋しるひよりうき
ちりめくや秋串の竹のぬれ草
菴の戸へ塔ひいさるゝ 桐一葉

星夕

かも川や串もれやらつらつらるる星も夕
その川紅のすくみささみえり
水あひ平島もゆくうその川

舟行

一月不に舟漕入るよて此川

灯笼

灯笼の油あうる復の事

露

檀溪

露にたるあつし誰住られざる茶の標

素外は師々むらりの追福の目

をりふふれも思ひおる人くハ

丹はの喜ぬは師葉津の

紀風をり

白雲ふたあつめ事さるおもひら

いさつる

いさつるや残るすしきさ度の松
山よみ色をそし稲妻にゆる海の上
舟よるしつらるしきさ

稲妻あり風つく庭の塘う那

秋風

あきう路や舟よるし舟へゆくさす
秋風の吹きさうしきさの月

須正寺の戸をいさつるあきさのう路

悼松兄

あきさう路や舟よるし舟へゆくさす
いさつるや残るすしきさ度の松
山よみ色をそし稲妻にゆる海の上
舟よるしつらるしきさ
稲妻あり風つく庭の塘う那
あきう路や舟よるし舟へゆくさす
秋風の吹きさうしきさの月

秋風やりあきさのう路

朝白

ひやくしやむ草のさく垣ぬらま
朝さうぬあさ白へちし物なく
いくほよの世を草のまの枝
蚊屋らに草見ゆは枝の

萩

露萩やむすひ捨せる縄をこれ
のそくすてもあかく萩の夕の草

よきほかによこる萩の小庭

桂五亭

よきおとて出留ふも居らう萩芒
萩ふ志をれせふよこる西日

萩

萩のぬやむるゆく海の萩の亭
らふとてもきゆくよの萩の亭

女房花

をうらへしうらこちなるぬふらうらふ

芒

陽きよの秋みもあけり花をきくま
芒もよもあけりやまのあすしちか
林しきたぬへてやゆもあせきあ
雪方さあの日あふ日したんせうあ

都みま

は梅のすゝむをがぬる雨あは

草花

きよみちく日のさひしんよ草花

稻花

湖のさけのひくさよ稲の花

菘

明るおのあけしきよみちくす
きりくすはさやいつまて風のを

雁

丁暮ふあきに日のおる河原うち
かきくまやくれきり一歩の田哉
十日不中萩吹ききて丁の暮
一ふゆに鳥のすし一羽空河原

三河の國榎堂を討ふ日

小舟に楫さして矢射

川の下流ふあきふ

まの丁のおのうせいのふみくれや

七言絶句

雁く竿にふせあふの丁へふせ先の
一あふふれ健ふふれ竿にふれ竿に
ふれ健ふふれ一ふさふよふれ
一ふふさふのふさふふにふり

鶉

わらあきふおきふふひさる鶉ふ

考ぐれ鴨のすしつり時もありさ

占

小松吹行笑ハさあこのみは

芙蓉

月宵く芙蓉日くにすの露

月

宵くに来るものちれを月を友

須广行

ひち名雨の峰

おづれをあやし地

小松たましらと入る子

あんのあハ袖小もあつす月の首

あらしへゆらせとする嘆

吹つすれ慥るも月の名孫は

あゝ〜

月〜く 雁の 低〜 浅路の
燈の 光を 覗く ありとく 月夜に
ひやく せし 月小亭 あり 木石の
築代や 山形く 一もく せし 月
松竹 あり や 月よて 有よ なる
名月 せし ありて せし 月夜哉
月見とて 申け せし 小橋哉

十五日山行

おれ〜人 同〜 ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと
の 月形 ありと ありと ありと ありと
南陽、母の 住る 露も ありと ありと ありと
と ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと
ありと ありと ありと ありと ありと ありと

わつりに一里晴山嵐をよもろく
現に秋色よもろく入る木の梢を
月をちのこしてうめの目おくれ初る
ことに嬉しく覺ゆる

松やうを松よあてて月見うを

雨の日信濃よゆく人を言ひしり

暎控を雨よの初しぬらふ月

雨晴山月高

海山を洗ひ河け来る月おれ

中秋あ一夕を月を洗ひてくる

十五おの雨にゆく降風木をさる

さうり吹あはしらすれを授さ

降あめをちうめくつうあ月

秋の花をゆても志けし月おれ

白園亭

古きやや老の寐さめにある月

貞池亭

おもむきゆく月此侍をる菴々那

山室た宿うる月のけしきおめりち
ふれををやくも麻寸らむもさうけ
こる飛の朝ちうく来さうめちうけ
心ふ牙待やあふれやあうらふら
うら終ふをおもをあうしぬ

水あけても

花や月

ちかきくのみり

画賛

海をを渡る月あけの縁も月おが

贈伯先四十賀

千代の坂路のりやよの雪もふも
月のふえりひてまよふらぬ

おもむきゆく年よるひとよ月の秋

とるりよむむしるをむつ月のせ

硯静亭

いさよひや月ふらりゆく萩のあき

八月十日 瓢合堂記

つゆきしきり

十六おの同きにゆれきる 瓢合堂

井戸田ふらり

いさよひもつゆきり月見るをむつ

十三夜

梅いろみ田まゝの人も月見うき

三河紀行

忠也上人のあつるもてと家も世人よハ引
ちえろりおけしつれをわつ住あひ
くる山の甘庵のさうしきとさうの都れ
四糸より辻に甘菰をしろ引とてしきり住
まへりそハ行徳を積るるてみよあ

山とよこそあをれ笑くか〜け
あ〜画癡の影よをとおもひ〜き
わさふもあ〜す山にそひ山よ〜ひの
まは〜う〜もや少〜三河の國よお解〜
ふ〜串するひ〜くをかく〜ひおてそこ
新大樹寺少〜いふ出寺にま〜つ時九月
十三日ちり〜中〜又巖の山よ少〜いふやよ
あ〜も清浄迷宋少〜〜さ〜す〜た〜あ〜あ

底よハ水夢を湛へ白雲の頂よハ秋の
色をともめ〜つ〜あり〜き〜地ちれハ
と〜て〜崎〜る〜山石根の夢あ〜う〜け〜た〜る〜を
ま〜ぬ〜ぬ
名をぬ〜る月ちぬ〜こそ海の〜人

秋歌

秋のおや 望よりけ〜る 後面

秋のおれありさむを思ひけしけさの
書あるに於しひるまをせむらさむしひる
よきあむりあむし心やあつしむす
うあふしこもあしむらそくあられそ
こま古へ人の心ひふるし事なる古言のこそ
まみうるうあさしやまこいあしむらむら
くしきのかはうの事しねえあはしむら
西行もせむらあともあつうしむら

あれまあすし作らむ朽木は
朽木はあまうしあつさうら思ひ入るあそ
よきホウけあうら山の果もも鹿の鳴は
あすみしとは誰人うあゆふあは
あまうんをひきあうへさむかこふく月は
さしあふふあの中しあしあはあは
秋のおき
あさうらあ
あのおくあま

F

書

秋雨

秋聲う巻き

住ちりーさところそよるれ種のも

ころもう浦も

種めああところくた日ハ入ぬ

彼岸

秋の夕に豆ぶくひうんうま

秋山

枯きりくーま松こそそゆ色種のも

秋水

智の野み毛赤るも深よあきみあ

鹿

鹿老きり書あーと啼おもあん

くめハけもとーゆけハ鹿めあ

きり山雪江う葉電よあそひ

門半て手ゆくひとも解ー鹿の夢

秋葉山の麓お国の屋敷

いふやふにいふのさめ

啼之鹿のあうらうと深き梅うさ
明果さうらうあーくも鹿のいささ

い菊

ちうきさくの山路のすれぬもあつれん
むしてくにゆいあうぬさくみむ

送ぬ叔帰故郷

父母を見る多れしさを菊の花

訪草菴

いふやふに菊もつくぬ庵の度
白き菊のーらうのあうらうあうさ
花あうに菊もあう寸ハささ

お中九日

せひ人ふ一枝くぬよき〜みさ

あき

うき事なれハ山よあし〜あき

秋暮

あき見る山のさよあきのくれ
よハ月うおや〜すそ秋のくれ

大穂亭

日のくれぬ日ハあけれともけのくれ

桑山子

あき〜ろき〜ひ〜た〜ら〜り〜さ〜う〜か〜し〜は

無題

晴蛉の十もりほく枯枝うあ
稻ま〜や〜川や田よ替々〜うあ
片扉〜あ〜さ〜う〜さ〜さ〜飽〜う〜那
松うさよ松あよ菴の灯ハあし

悼如東贈帯梅

あき〜き〜りの人の顔さ〜つ〜れて〜ゆく

八月八日の日持行上人をこの國へわを
うふとそひしめくやそ四十九院とつ
やふにほもちふ薬の内を三小を發給ハ
おとろふしきる由縁の上をよすことい
ず縁よそ申しくくる

おとろふしきる由縁の上をよすことい

東次子あて

何をしきる由縁の上をよすことい

九月十日の日記

九月十日の日記

九月十日の日記

九月十日の日記

卓池輯

枇杷園句集卷之四

冬

時雨

その時るをききりきりありあといふや
雪海よりしるしありきりきり

竹葉軒

さき舟にさきやしく雪降りしるしが
独居や古人うやうの小舟しるが

芭蕉忌

世にふるはたふりたませぬ時を記

素堂、蕉翁の善友あり一日同農
たてて伐の破れやれく霜の荷葉のうら
を悲しむ世の形見草として甲子
吟行を嫌しと曰おあるおよむる
秋志念のむね似たりその牡丹の

隠士の向ちれはちり少くまことそ
執を弄しそり手向草と云

月時雨さりとそい

古きけしきうま

一わしにおきしとれると須戸明石
山茶花に手をうけしれを時るる

茶室迎友

宗ありふあるやしとれぬの松のうけ

おーれに小饒懐ある白ひら

東門公子と申せざる公子おすし
雪塚のやまに狩りてお獲もの
あまこつと中に一ひらりも平の士文子
に下さる此士文子琵琶の上手
あんなあやしむるこそおに呉掬い
家の子ありちり比あふあに

いふ琵琶造りとかしきまぬ
そらすのちのあしとて人く
はと花あふおのこの一
おちりりり萩中挨拶そのおの宗通
として四行うきたの
嘈こ切くとあきをま
あをれみしこの時雨も月も
たこひぬ

時雨来るうらうらとくもの電光の上
かる夜のあるもさほこそ世の傍り
ちりともや電光のくもをたつらぬ

落家

落葉せしく朝のすめ風おをささるま
あさしくや落葉搔下す屋根のう

不破の関より

ちおふあけそりのるの鳥かふく落葉の

大和の國を行跡しと畝火のや万を
いほこ耳をし山をとりしをさしきつら
あやしくゆめあまたに樵夫の立るを
吟うけさるのうくものやさんゆうく
もの心むせりしあけと笑とりむるけ
——きいもあつた

け人も耳をし山を落葉搔

木枯

まゝにやういへぬへるゆの野

梅留る

ちかしくして日もとけしーの苔の上
たうーしや白ふくゆる春のしんま
ホクーしや海一をいよある月

細代守

宇治よ妻あるとけしーるんる思ひん

千尋

せほのぬるゆのうさしんま
掃るやいぬのうちふも晴しり

五道真

野る野るけを枯らるる

大はふて

湖を野て野る

おあけうな

冬月

あくまうも余よあさるもその月
さうしゆく少苔ふむその月夜哉
さうくも雪降あくまやその月

大魚追悼

ほろ入あうるそハふよかれ尾甚

枯壺

あつしゆく住やう少壺をそらる

詩仙堂帰路

犬山のささもくれゆく枯壺を

訪野菴

かれくやせまたにお向ふ庵の大

ま阿う菴を汚ひて

これ見よ少霜の田芥を菴の心

甚ふかすらひ月よちきふ夫妻の枕を

五百生の者解少しゆしあふう一夜の露也
きえぬみそをうあさまきあも此悲ひ
よあさうとそち中たしをしきみり子
社あひるあつしいましをへんとして半してハ
あゆめ少しゆふをりみはたうてをちる
あつしの美一心を見るうちせうるは
又あうとあしとあめさゆものちるう44く
山吹のうまやまあうささ松の心

船泊のさやを眺むる窓に
甲く

雉も鳴り犬も吠おお此山を引

水

勝山を舟さし下せハ藤舟引す
さう日を見す風あつく雪さへ
降らるるうささへを徹す

白浪のうけさるハ氷る小さうな

冬木立

芭蕉翁百回忌

十句巻戻

ちちこよるものせしむる冬木立

雪

まどしたるれきと山見しよるせ
ちちこよる人のくれきるひの木立
雪やあふく雪に埋れき

雪掃やいつあそく来きり雪雀
さいつても雪ハ降ちるも大山家
月雪やこよひも月ハ雪の内

念云

笠ふちるありし念云にさへおまきり

許半と云

あともなふし床さあめ友と許半と云
南無月夜も母とちちの許半と云

春暮

年の満きたる暮む少しをる日未表少
川流にゆく夏に湖水あやと描り洞と
川藤竹をうち溪水をけりて其
上にあつ地塘尾花枯て雪のこく
鳥鳴新沈き水底は清し是より
路を西にとこしと川苔路中へに廣く
ホたるして民衆適よ見伸にさや年の

田意よとて草葉のうさり松葉の
やうのもの引りきり

ゆくともとの廿九日も子の日う南

六月の一日とてしきめの三五
は暮雨蒼の大人よいさあをれて共に
子日をしやふ之行たあけ梅らんれ
ちか初とてす月雪少のささりつ
おもはすも亦まにめらるる来よの二年れ

始終を木よよせしむるゆゑに
心少く感ある也

野秀亭

襟をきりや胎のくるくる敷のふけ
ゆく少くころりともせぬ山おれ
三丁もちや小松くらも来る日市
立きまのちを我を見る

少くられぬ木よよせしむるゆゑに

花月一葉のあそびにうめの日も
既よられしゆゑもちや一瓢の
酒の強きをくまなく飲まぬ

瓢 曾平

瓢 おさし
少くられぬ

蕉雨輯

枇杷園句集卷之五

雜

倉澤

ふも見てくらくを不考の山

より山馮月う四十の賀よ

より山翁まきハ印との恥うしき

大忠の隈あき宵のよはひう那

住のひさゆかしこさ升のをやむ

海人の子等の朝の于家にむれむさ
ひ木捨ひあるきなるうぢさうひさち
ま少小いさけ昔をささしきり歸り
さて翁うしゑるよあはれとおも
浮のまくあはれあうたきあるとさ
うあつくれ跡の写ゆくい幾代を
あんといふとさ

宵時中やうらむとくつと和方の浦

大黒賛

花よ實よ四時うやうの子の日ま

冬春園の桜見せせまふとありさ
ううひ侍る泉石のやうの中さけ
木を植るまゆ子のとく植させま
七日の日早き桜はちやほひて行の

あつたくおちしるしうれはの上
漕舟のやしりる象厚の景色もおもひ
やられきりさる漕舟の小さき舟といは
て侍れしとてよりしとふも似たりと
あつしきさるの五文のいふさるのと
さくら木深きやよにふいしきり停雲
閑よぬる

胡上傳 雲のさるし在は深き

暮下傳 雲の深き未き

若津晚 雲

東と三ふ百峰 晚雲中
出芙蓉芙蓉白雪千秋色
入翁林照古木

平曲會式

床頭置琵琶二面

彈中或弦断 則頭設一面

急以代之

曲中禁欲笑吸烟管步

唾壺必應有意凡曲調

者貴欲暢々々則說盡

山中世限了

此多其妙二海やうに月の光

示らる

何の世時よりあるらん候のちとよて連歌

あそをさしるるに山居をる水のきりみ

ふよさうりさうの白葉舟わはらうたを

おほせはしきりのちて流壺に赤く枝を

赤入たおさうりきるをともめ給へりありて

るりよこし

曲終不收撥更唱祝世之句

琴中助言

あそふきみ曲終了

自然を失へり爲にして曰汝小成を
めらば何とらいせん曰寂し酒をこめん
何とらいせん曰躁し米をこめらば何とら
いせん曰おちちを又叱して曰采あらずも
此何と自然をあるはゆんを飄々然と
ししるの歌て曰

鷗く様を口をれと孔鷗

同し流の蘗堂草 虚歌

鷗く様を口をれと孔鷗

同しちうれのぬる 飄 虚歌

ちうれおちる冬の海 虚歌

松兄輯

後

山樹のふちをめぐりて
一年の二百五十日の風月を
多しと云ふは子に
相違すも大なること
自り覚え毛力有り
糸の多しと云ふは

年々波自り糸は丸を拾ひて
ついで糸を以て西園に糸を
かゝる風月程は乃
新糸乃程は

糸は丸

山輪



